
新潟歴史資料救済ネットワークの5年間の取り組み

矢田 俊文・笹川 真理子・原 直史・
池田 哲夫・飯島 康夫・古賀 豊

(新潟大学)

1 はじめに

2004年10月23日の中越地震発生の後、新潟歴史資料救済ネットワーク（11月発起、以下、新潟資料ネットと記す）は結成され、文化財・歴史資料の救済に取り組んできた。2007年7月16日には中越沖地震が発生し、資料救済の取り組みは続いていった。

2009年10月で中越地震から5年が経過した。その間、新潟大学人文学部に事務局をおく新潟資料ネットはさまざまな取り組みをしてきた。2004年10月以後、新潟大学人文学部には地域文化連携センターが設置され、地域文化連携センターとしても地震被災地からの資料救済に取り組んできた。さらに、新潟大学には災害復興科学センターが設置され、執筆者の矢田・原・池田・飯島・古賀は同センターアーカイブズ分野のメンバーとして地震被災地からの資料救済に取り組んできた。

本稿ではさまざまな取り組みのうち、新潟資料ネットが手がけた特有の活動についてまとめておきたい。なお、新潟資料ネットは、人文学部、新潟大学人文学部附置地域文化連携センター、新潟大学災害復興科学センターアーカイブズ分野と連携して活動していることから、新潟資料ネットと深く関わるこれらの組織の取り組みについても紹介していく。

2 新潟歴史資料救済ネットワーク立ち上げ

中越地震が発生した2004年10月23日当時、新潟県の資料保存活動で大きな課題は、相次ぐ市町村合併のなかでいかに資料を保存していくかという点であった。新潟史学会も同年10月31日にシンポジウム「市町村合併と公文書保存」を開催するため準備をしていた。大地震は起こったが、新潟市内も新潟大学も無事であったので、予定通りシンポジウムは開催された。県外から報告者として講演をお願いしていた丑木幸男氏（当時、国文学資料館アーカイブズ系教授）には飛行機で新潟まで来ていただいた。地震直後は上越新幹線の脱線の影響で、羽田—新潟間の航路が臨時にもうけられていた。

シンポジウム開催日の午前中に有志で新潟資料ネットの立ち上げについての打合せが行われた。午後のシンポジウムには新潟県内の資料保存に関心のある研究者のほとんどが参加し、市町村合併からどのように文書を保存していくかという議論とともに、地震被災地からどのように資料を保存していくかという議論も行われた。そして、シンポジウムのなかで新潟資料ネットの立ち上げと新

潟大学人文学部に事務局を置くことが提案された。

11月4日には、新潟大学人文学部の日本史・地理学・考古学・民俗学の教員の同意により、事務局を人文学部に置くことが決まった。翌日にはウェブページとメーリングリストが開設され、11月20日には、小千谷市A家の蔵からの文化財・歴史資料の救出に取り組んだ。

3 新潟歴史資料救済ネットワークの文化財・歴史資料搬出活動のための事前準備について

新潟資料ネットの5年間の取り組みについては表1を見ていただくとして、ここでは、活動のための準備について説明しておきたい。

(1) 文化財・歴史資料の救出活動のための準備について 1 —2004年11・12月—

まず、新潟資料ネットが最初に取り組んだ小千谷市A家の蔵からの文化財・歴史資料救出活動の準備について記しておきたい⁽¹⁾。

活動の当初は何が必要なのか、どれだけ必要なかわからず、実際の活動を通してその都度必要なものを揃えていくという状況だった。11月に活動をはじめて、事務局側で準備したものは次のようなものである。

活動時に常時準備したものは、腕章、名札、救急箱、事務用品一式、デジタルカメラ、ビニール袋(大中小)、付箋紙、紙、ティッシュペーパー、ウェットティッシュ、マスク、軍手、カイロ、紙コップ、割り箸、タオル、飲料、軽食・菓子である。資料の運び出し作業のときに準備したものとして、ヘルメット、ガムテープ、紐、ブルーシート、カッター、はさみ、フェルトペン、工具類がある。また、目録作成作業や資料調査活動で準備したものは、目録カード、調査カード、クリップボード、鉛筆、消しゴム、鉛筆削りがある。以上のものはまとめて新潟大学の一室に保管し、活動日の前日までに必要分を選び分けておいた。

準備に際して留意したことは、次の点である。第一に、事務用品一式(筆記用具、はさみ、セロハンテープ、のり等)はまとめて一つの箱に収納して持ち運び可能にした。第二に、飲料は主に500mlのペットボトルのお茶や水を用意し、より体力を消耗する活動の場合はジュース類も準備した。寒い時期には温かい飲料が喜ばれた。第三に、菓子類はチョコレート・のど飴・ドーナツなどを中心に用意しておく。活動時は甘いものの減りが早く、個別包装ですぐ摘めるものを選び、さらにおにぎりなど軽食も一緒に準備した。参加者の年齢層の幅が広いため、おにぎりの具はなるべく一般的なものを用意した。そして、これら食料・飲料からでたゴミを分別して捨てる、あるいは持ち帰ることのできるゴミ袋を用意した。第四に、マスクなど消耗品は、参加人数の倍近く用意し、運び出し用のガムテープ等についても大量に持っていった。

また実際の活動を通して生じた反省すべきところや改善すべき点は次のようなものであった。

第一回目の小千谷市での運び出し作業(2004年11月21日) 梱包材は新潟県立歴史博物館が準備したもので対応したが昼頃には不足し、何度か地元のホームセンターへ買出しに行った。特にガムテープとエアパッキンが不足した。また、梱包済みの文化財・歴史資料を一時的に置く場所や雨よけの覆いのために、ブルーシートはサイズの大きいものを何枚か用意する必要があるとわかった。

梱包材や食料の買出しは院生・学生の2~3人で調達に行った。第一回目の昼食は地元の弁当屋で用意しようと思っていたが、震災後、営業を始めていた市街の弁当屋は予約が多く入っていて時間がかかるため、飛び込みでの購入は無理であった。ファスト・フード系の飲食店はまだ営業を再開

しておらず、コンビニエンスストアでおにぎりやパンなどを購入するしか手立てがなかった。しかし、昼時のコンビニエンスストアで、約 20 人分の昼食と飲料・菓子類を買うことは、被災地の方の分まで買い占めてしまうことになり、気が咎めた。これは第一回目の大きな反省である。

第二回目の小千谷市での運び出し作業（2004 年 11 月 29 日） この時は、小千谷市へ出発する前に新潟大学付近のコンビニエンスストアで食料・飲料の調達をした。しかし、早朝の時間帯のため店員は少なく、対応に手間取り、他の客に迷惑をかけてしまった。

新潟県立歴史博物館での目録作成作業（2004 年 12 月 12 日） 12 月に入ると新潟県立歴史博物館に一時避難させた小千谷市 A 家の文化財・歴史資料のクリーニング・目録作成作業が始まった。飲料や菓子など保存のきくものはあらかじめ事前に準備しておき、この時の昼食は博物館側で用意していただいたので、当日の朝は出発前に新潟大学付近のコンビニエンスストアで予備のおにぎりや菓子のみを購入した。このように次第に事前準備の手法が固まってきた。また、午前と午後毎回 20 分程度の「おやつ休憩」をとるようにした。その結果、作業にメリハリがつき、目に見えて作業がはかどるようになった。

以上が、活動初期 2 カ月の準備作業である。2004 年 11 月～2005 年 10 月までの活動内容と購入品目については、表 1・表 2・図 1～3 を見ていただきたい。

（2）文化財・歴史資料の救出活動のための準備について 2 —2007 年 8 月—

2004 年から 2005 年まで 1 年間の取り組みが終わると、日常時の取り組みに切り替えつつ、復興のための文化財・歴史資料の活用を考えねばならないと思っていた。その矢先に中越沖地震が発生した。この時の活動の準備についても記す⁽²⁾。

中越沖地震は 2007 年 7 月 16 日に発生した。新潟資料ネットは、8 月 25 日、新潟県刈羽村教育委員会・新潟県立歴史博物館に協力し、被災地の刈羽村民俗資料収納庫から民具を旧寺泊高校体育館に一時避難させる作業を行った。これまでの活動は中越地震が発生した 10 月以降、晩秋から春にかけて行われたため、防寒対策に重点をおき、カイロなどの物品も補充し準備してきた。しかし、今回は真夏の猛暑の中での活動となるため、暑さへの対策を念頭におき準備する必要があった。

資材の準備 梱包資材や作業に必要な物品については、新潟県立歴史博物館と事前にそれぞれが準備するものを打合せ、新潟資料ネットで必要となる資材を 8 月上旬から準備しはじめた。民具を梱包するのに必要な資材として、エアパッキン（50m×5 巻）、巻ダンボール（50m×5 巻）、ガムテープ、養生用テープ、ビニールひも、防虫剤、荷札を準備した。梱包資材以外では、腕章、名札、ヘルメット、台車、ゴミ袋、ブルーシート、はさみ、カッターナイフ、軍手、マスク、マジックペン、工具箱、デジタルカメラ、懐中電灯、集合場所の目印用プラカード、文具（筆記用具、セロハンテープ、のり、クリップなど）、救急箱、ウェットティッシュ、ティッシュ、トイレトペーパー、タオル、紙コップ、マドラーを準備した。

なお活動後には、使用された道具の数量や不足したものなどの記録をつけて次回の活動に備えている。この活動の準備にあたっては、2005 年 5 月に行われた旧山古志村での活動記録をもとに準備を行った。さらに今回は夏の屋外作業となるため熱を冷ますための冷却剤を準備したが、使用しないで活動を終えることができた。活動当日に急遽必要となった道具は、ほうき、小ぼうき、ちりとり、クリップボードで、ほうきとちりとりは活動場所近くのホームセンターで購入した。

飲料・食料の準備 最も留意した点が炎天下での作業で脱水症状を避けるための対策だった。水分補給のための飲料は、500ml ペットボトルでミネラルウォーター・お茶・スポーツ飲料、900ml

～20ペットボトルでコーヒーやお茶、紙パックの野菜ジュース、冷凍可能な状態になっているスポーツ飲料を準備した。500ml ペットボトルだけでも参加者1人につき4本くらい確保できるよう準備した。500ml ペットボトルはおもに作業中やその合間の休憩時間に消費され、スポーツ飲料、お茶、ミネラルウォーターという順に消費量が多かった。この3種類の飲み物については、活動時はつねに準備しておいた方がよく、特にミネラルウォーターは、薬を飲む時などさまざまな用途で必要となる。コーヒーも昼食休憩時などで要望が高い。さらに昼食時には糖分補給のためのジュースも準備しておいた方がよい。

食料として準備したものは、おにぎり、パン類（惣菜パン、菓子パン）、高栄養補助食品、ゼリー系飲料、菓子（飴、クッキー、ドーナツ、煎餅など）、果物である。当初、夏場なので溶けやすいチョコレート製品は避けたが、要望が高かったため現地調達した。手軽に糖분을補給するために季節を問わずチョコレート製品は必要のようだ。また、作業中の休憩時間に人気が高かったのはゼリー系飲料で、固形物よりも手に取りやすいため、午前と午後の休憩時間ですべてなくなった。

飲料、食料とも活動の前日までに準備できるものは用意した。昼食用のおにぎり100個・パン20個（約40人分。1人当たり約3個）は、個数確保と消費期限があるため事前に大学付近のコンビニエンスストアへ発注し、当日の朝、出発前に引き取りに行った。その際に予備のおにぎりやパンを買い足した。

衛生面から飲料と食料はできるだけ保冷状態を保てるように、クーラーバッグ4枚、クーラーボックス1個、保温・保冷の可能な給水ポット1個（クーラーボックスとして使用）を用意した。おにぎりやパンは購入後、保冷剤を入れたクーラーバッグ2枚に入れ、残りのバッグには、当日の朝、保冷剤と500ml ペットボトルのスポーツ飲料などを入れた。入りきらないペットボトルは箱のまま持参し、休憩中、空いたクーラーバッグへ新しいペットボトルを補充していった。クーラーボックスと給水ポットにはコーヒーやゼリー系飲料を保冷剤とともに入れた。おにぎりなど食料が入っているクーラーバッグは、昼食休憩場所となった環境改善センターで預かっていただいたので、涼しい室内に置いておくことができた。それ以外の食料と飲料については作業場所へ持って行き、できるだけ日の当たらない場所へ置いた。容器を保冷効果の高い順に並べると、①給水ポット、②クーラーボックス、③クーラーバッグとなる。

しおりの作成と配布 搬出場所から搬入先へはかなりの距離を移動した。参加者が個別に家用車で移動したため、「刈羽村民俗資料収蔵庫からの民具の救出活動のしおり」（資料1、もとはA3版）を作成して参加者に配布した。しおりには、当日のスケジュールと注意事項、活動時の役割分担を記載した。班編成は当日に発表された。また、しおりの裏面には地図を付けた。これまでの活動では、当日の日程や役割など作業の直前に口頭で説明しただけであったが、参加者一人一人が当日の動きを把握した上で行動するにはこのようなしおりの配布は有効であった。

猛暑での取り組みは、多くの参加者で作業を早めに終え、すべての人が無事に帰ることを目指した。2008年5月には一時避難させていた旧寺泊高校体育館から、新しい刈羽村民俗資料収蔵庫への民具の返還作業を行った。このときは、参加者の安全を考え、新潟大学からの教員・学生の参加者はレンタカーで作業地点を移動した。

活動を終え資材の残存状況を確認すると、ほとんどの消耗品、エアパッキンやガムテープは用意した量の半分が残っていた。また飲料や菓子類も、差し入れを含めて半分近く残っていた。結果として準備した量が多かったということになる。しかし、いつも活動場所が資材や食料をすぐに調達できる場所にあるとは限らない。実際に、旧山古志村での活動では、資材や飲料・食料が不足した

が現地調達ができる場所も時間もなく、買い足すことはできなかった。また、小千谷市では罹災後一ヶ月の被災地で大量の食料を調達することになり、反省したことがあった。これらの反省の上に、資材や食料を事前に準備するさいには不足することがないように用意することが大切だと思う。

4 山古志から搬出した民具・文書資料について

2004年12月後半に新潟資料ネットは山古志村教育委員会・新潟県立歴史博物館に協力して山古志村民俗資料館からの民具・歴史資料の搬出を計画していた。しかし、突然の降雪が17年ぶりの大雪となり、搬出計画の延期を余儀なくされ、作業は雪解けを待つことになった。搬出作業は梅雨に入る前の5月に実施した。具体的な作業の様子については、DVD『山古志民俗資料館収蔵品救出プロジェクトの記録』⁽³⁾を見ていただくとして、ここでは、搬出した民具と文書資料について記しておきたい。

(1) 山古志地域から搬出した文書資料について

旧山古志村には文書資料の保管場所が2か所あった。山古志中学校寄宿舎と山古志村民俗資料館である⁽⁴⁾。

山古志中学校寄宿舎は『山古志村史』編纂の拠点で、収集された文書資料などの保管場所として機能し、編纂事業終了後も保管場所として維持された。収集文書のうち個人所蔵文書などは順次返却されたようであるが、近世種芋原村の庄屋や近代種芋原村の戸長・村長を勤めた家の文書群である坂牧家の文書や、1956年(昭和31)に合併成立した山古志村が旧4か村(種芋原村・太田村・竹沢村・東竹沢村)から引き継いだものも含めた行政文書など、村所有の文書資料は、その後も長く寄宿舎に保管されていた。この寄宿舎は1987年(昭和62)に閉寮し寄宿舎としての役割を終えたが、その後も村の文書資料保管施設としての役割を担っていた。

旧山古志中学校寄宿舎のほかに山古志村民俗資料館にも文書資料が保管されていた。同資料館の収蔵品の主体は民俗資料としての民具類であるが、若干の文書資料も受け入れられていた。

文書資料の救出活動は、山古志民俗資料館の民具救出活動と並行して行われた。長岡市立中央図書館文書資料室では、山古志村の長岡市合併(2005年4月1日実施)が予定されていたこともあり、地震前の2004年8月に新潟県立文書館が実施した歴史資料所在調査に参加し、山古志中学校寄宿舎に保管されていた坂牧家文書等の現況を把握確認していた。こうしたことから、救済活動は、民俗資料館の民具類とともに、中学校寄宿舎の文書資料も対象とすることとして計画された。

5月21日には主として山古志中学校寄宿舎からの搬出作業が行われた。この寄宿舎は鉄筋コンクリート製の建物であったが土台にひびが入り、窓も一部割れていた。特に文書資料が保管されていた部屋は、文書を収納していたスチール製のキャビネットが倒れてドアをふさいでいたため、割れたガラスを撤去した窓から中に入っての作業となった。散乱した文書資料を段ボール箱に入れて2トントラックに積み込み搬出した。

またこれと並行して民具類の搬出が行われていた民俗資料館からも旧村役場の文書資料等を大型乗用車等に分載して搬出した。さらにこの民俗資料館には、この他にも若干の文書資料、書籍類や新聞、屏風などが保管されていたが、紙類としてまとめようとの判断から、これらも他の文書資料とあわせて移動・保管することとし、翌22日にこれらの搬出作業が行われた。

これら文書資料等は長岡市浦瀬町の長岡市役所浦瀬町倉庫に搬入された。その数は段ボール箱で

272 箱に上った。なおこの両日の作業には、長岡市立図書館文書資料室の職員を中心として、新潟県立歴史博物館・新潟県立文書館の職員に、かつて山古志村史編纂に加わったメンバーのボランティア参加も含めて、計 12 人が携わった。こうして山古志村において村が所有・保管していた文書資料類は、長岡市役所浦瀬町倉庫に移動・保管されることになった。

表 3 旧山古志村より長岡市役所浦瀬町倉庫に移動した文書資料等

搬出日	搬出場所	資料	分量	備考
5月21日	山古志中学校寄宿舎	坂牧家文書	51箱	
		旧山古志村役場文書	121箱	
		その他	37箱	山古志村史編集資料 パネル展関係史料等
	山古志民俗資料館	旧山古志村役場文書	48箱	
5月22日	山古志民俗資料館	その他	15箱	新聞、屏風等
計			272箱	

金垣孝二「山古志地域の文書資料について」(『中越地震被災文化財救済委員会事業報告書』、2005)より(一部修正)

ここでは搬出した 272 箱のうち民俗資料館に保管されていた次の 2 つの文書資料について紹介しておきたい。

〈佐藤久村長関係資料〉 1964 年(昭和 39)より 4 期 16 年にわたって村長をつとめた佐藤久氏の関係資料である。佐藤氏に宛てた葉書・書簡と多くの人びとの名刺が収められた段ボール箱は 2 箱あった。確認できた限りでの葉書・書簡類の消印期日は 1964～72 年で、これは佐藤村政の第 1 期・第 2 期に相当する。これはおそらく佐藤氏が村長の公務の中で受け取った書簡類で、名刺もまた佐藤氏が公務に関係して受け取ったものであろう。名刺には詳細なメモが書かれているものも多い。

〈牛の角突き関係資料〉 「昭和五十三年六月十八日 文化財指定記念 記念牛の角突き関係書類在中」と書かれた山古志村役場の茶封筒に入れられたひとまとまりの資料である。

これは、1978 年(昭和 53)5 月 24 日付けで「牛の角突きの習俗」が国の重要無形民俗文化財に指定されたことを記念して開催された祝賀行事と記念角突きに関する一括資料で、当日の式典の予定表や式典で読まれた祝辞、出席者名簿などが含まれている。

この他には、「習俗保存テキスト作成資料在中 55.3.1 資料館保存」と朱書され、「二十村郷牛の角突き習俗保存会」のゴム印が捺された山古志村役場の茶封筒に入れられた牛の角突きに関係した一括資料もある。

この 1970 年代後半から 80 年頃にかけての時期の山古志村民俗資料館は、日本観光文化研究所の須藤護氏が中心となり、資料館の収蔵資料の充実と牛の角突き習俗の記録保存を両輪として、精力的な活動が繰り広げられていた。これらの資料はまさにそうした時期の記録である。

詳細なメモが書き込まれている旧山古志村長の膨大な名刺も重要な文書資料である。また、かつての民俗資料館自体の活動に関わる資料の存在も重要である。今回の救出活動では、紙媒体をまとめるという観点から、これらの資料は民具類とは分けて、浦瀬町倉庫へ搬入した。現在なお継続中である民具類の整理作業とも有機的に関わらせながら、これらの文書資料を整理・活用していくこ

とは、将来のあるべき民俗資料保存公開施設を構想していく上でも、重要な意義を持つと思われる。

(2) 山古志民俗資料館所蔵の民具の搬出と目録作成作業について

山古志民俗資料館から搬出された民具はその後、目録作成作業が行われた。ここでは、民具の搬出と目録作成作業について記しておきたい⁽⁵⁾。

山古志民俗資料館の民具は、新潟県文化行政課と柏崎市教育委員会の協力で、新潟県文化財収蔵館（新潟市）、及び旧柏崎市立鶴川小学校に搬入された。この作業は緊急の救出であったため資料館の剥落した土壁やホコリなども資料に付着したままであった。

資料館の所蔵資料は約 5,000 点ともいわれるが、肝心の資料台帳も被災により所在不明、資料に付いていたはずの付票もほとんどが取れて消失しており、資料の状況は不明のままであった。救出・搬出はしたものの、資料の点数も名称もわからないというのが実態であった。

夏季休業期間中、博物館夏期野外調査実習参加者の協力を得て、2005 年度～2008 年度までの 4 年間にわたり、救出した資料の整理を実施してきた。毎年 8 月最終週の月曜日～木曜日の 4 日間をそれにあててきたが、初日には大学で、資料の取扱方やスケッチ、写真撮影、資料カード（台帳）の作成などについて基礎的な事項を講義し、2 日目からは実際に新潟県文化財収蔵館で資料整理と資料カードの作成にあたった。

山古志村は長岡市と合併し民俗資料館の所管も長岡市教育委員会に移ったため、世話役として長岡市立科学博物館山崎進学芸員（民俗担当）に対応いただくことになった。

2005 年 8 月から整理作業を始め、4 年目の 2008 年度に新潟県文化財収蔵館に所蔵した分の資料の整理と資料に伴うカードが完成した。

2005 年度は新潟大学の教員と学生で整理作業を行ったが、地元の人でなければ、資料の名称、用途、使用法などがわからないことから、2006 年からは山古志支所 1 人、旧山古志村在住の古老 2～3 人に加わっていただき資料カード記載上の充実を図った。

4 年間に実施した資料の整理総点数は 973 点で、年度ごとの整理点数等は、次のとおりである。

2005 年 8 月 30～9 月 1 日	参加学生 29 人・新潟大学教員 2 人、整理終了（カード作成終了） 点数 329 点
2006 年 8 月 29 日～31 日	参加学生 13 人・新潟大学教員 2 人・長岡市立科学博物館 1 人・ 山古志分室 1 人・旧山古志村民 3 人、整理終了（カード作成終 了）点数 140 点
2007 年 8 月 28 日～9 月 1 日	参加学生 27 人・新潟大学教員 2 人・長岡市立科学博物館 1 人・ 山古志分室 1 人・旧山古志村民 2 人、整理終了（カード作成終 了）点数 284 点
2008 年 8 月 26 日～28 日	参加学生 17 人・新潟大学教員 2 人・長岡市立科学博物館 1 人・ 山古志分室 1 人・旧山古志村民 2 人、整理終了（カード作成終 了）点数 220 点
2009 年 9 月 1 日～9 月 3 日	参加学生 12 人・新潟大学教員 2 人・長岡市立科学博物館 1 人・ 山古志分室 1 人・旧山古志村民 2 人、整理終了（カード作成終 了）点数 89 点

※2009 年からは、旧山古志村立虫亀小学校で整理作業を実施している。

民具の避難は緊急を要したため現状のまま搬入した。そのため、ホコリや害虫、カビなども同時に運び込むことになった。民俗資料館も雨漏りをしており、資料によっては含水し、シロアリの発生していたものもあった。搬入先では新潟県立歴史博物館の職員により殺虫剤（ブンガノン）処理が実施され、被害は最小限に食い止めることができた。

初年度からの作業の段取りは、資料の保存方法として近年提唱され取り組みが強化されつつある IPM（Integrated Pest Management, 総合的有害生物管理）の指針に従い資料の清掃を行うことをこころがけた。その作業はおおよそ次のようなものであった。

- ① クリーニング—民具に付着したゴミ、ホコリなどを中心に清掃
- ② 破損や劣化の恐れのないものは外へ搬出してブルーシートの上で曝涼
- ③ 資料 1 点 1 点の情報を記入。付票のあるものはそれを忠実に転記。情報のないものは旧山古志村の古老から名称や使用方法などについて教示を受け、資料をスケッチ、採寸、観察上の特徴等を記入しカードを完成させる
- ④ カードの記入が終了したものから収蔵庫に戻す
- ⑤ 同時に衣類などにはパラゾールなどの防虫剤を加える

以上の集積された資料カードは、現在、長岡市立科学博物館に保管されている。

このような目録作成作業を行っていった。資料を整理した中から、牛の飼育と角突きに関連する民俗資料、モクギユウとネコについて記しておく⁽⁶⁾。

〈モクギユウ（木牛）〉 旧山古志村（長岡市）、小千谷市など「二十村郷」といわれる地域では、江戸時代から行われている闘牛の一種、「牛の角突き」（国指定重要無形民俗文化財）行事が盛んに行われていた。そうした土地柄を反映する子どものおもちゃとして木製の牛がある。モクギユウを玩具として男の子にあたえ、子どもはこれを使って角突きのまねごとをした。小さい頃から角突きへの関心を持たせる絶好の手作りの玩具となっている。

〈ネコ〉 冬に牛の背に着せる藁布団で、ネコ（寝衣）と呼ぶもの。ネコは冬期間の寒さから牛を守るために背中にかけてやるもので、古い筥などを転用してそこに縄を通して使うことも多かった。

5 新潟資料ネットの活動記録の映像化とクリエイティブ・コモンズ⁽⁷⁾

新潟資料ネットの特徴的な取り組みのひとつに活動記録の映像化がある。次はこの点について、記しておきたい。

活動記録の映像化は、2005 年 5 月の山古志民俗資料館からの民具・歴史資料の救出活動の映像化から始まった。その後、2007 年 8 月の刈羽村民俗資料収蔵庫からの民具の搬出活動、2008 年 5 月の新刈羽村民俗資料収蔵庫への民具の返還活動の記録を映像化している（表 1）。

山古志民俗資料館からの民具・歴史資料の救出活動の映像化のために撮影班を組織した。撮影班は新潟大学人文学部情報文化課程の教員 2 人と院生・学生 3 人が撮影班となった。撮影班は撮影のみの担当であった。カメラは 2 台回した。1 台は近距離用、もう 1 台は活動全体を撮影するものに使い、10 時間以上の映像を撮影した。

5 月の取り組みが終わると、撮影した 10 時間分の映像を 30 分程度に編集する作業に取りかかった。初期のカットの作業は、日本史と民俗学の院生に依頼し、その後、日本史・民俗学の教員と映像担当の教員が協議して 25 分の DVD に仕上げた。

その協議の過程のなかで、この DVD にクリエイティブ・コモンズ・ライセンス⁽⁸⁾ を付けて刊行することを決めた。クリエイティブ・コモンズ・ライセンスを付けることにより、作成した DVD を自由に、複製・頒布・展示・実演できることになる。新潟資料ネットは営利目的の組織ではないのであるから、著作権にしばられずに自由に利用できる DVD を作成することが重要である。

中越地震・中越沖地震後のさまざまな組織の取り組みについては、多くの放送局が映像化していた。2005 年 5 月の山古志からの民具搬出活動も放送局の取材があり、ニュース番組で流れたが、それは活動のほんの一部であり、取り組みの全体像を映像化したものではない。資料救出活動を資料として保存するためにも、また、新潟県における資料救出活動を理解していただくためにも、活動を映像化することは重要である。このような取り組みは、資料救出を目的のひとつとする組織がその取り組みそのものを資料として保存する取り組みでもある。

新潟資料ネットが作成した資料救出活動の DVD は、全国の組織、新潟県内の公共図書館に寄贈するだけでなく、新潟大学学術リポジトリに収録し、誰でも見ることができ、ダウンロードできるようにした。資料の保全をめざす組織は自らの活動そのものを資料化する取り組みも重要である。

6 おわりに

中越地震から救出した小千谷市 A 家の歴史資料はまだ小千谷市への返還が終わっていない。また、山古志民俗資料館・旧山古志中学校寄宿舎の民具・文書資料もまだ山古志に戻っていない。

新潟資料ネットは、今後も新潟県内の博物館・文書館等と連携しながら地域文化の再生のために取り組みを続けていきたい。

註

(1) 以下の記述は、笹川真理子「新潟歴史資料救済ネットワーク活動のための準備について」『新潟史学』53 号、2005 年に拠っている。

(2) 以下の記述は、笹川真理子「新潟歴史資料救済ネットワーク事務局の事前準備—刈羽村民俗資料収納庫からの民具救出活動の場合—」『災害と資料』2 号、2008 年に拠っている。

(3) DVD『山古志民俗資料館収蔵品救出プロジェクトの記録』（25 分版）製作、新潟大学人文学部附置地域文化連携センター・新潟歴史資料救済ネットワーク、2006 年

(4) 以下の記述は、原直史「旧山古志村救済文書資料の概要」『災害と資料』2 号、2008 年に拠っている。

(5) 以下の記述は、池田哲夫・飯島康夫「旧山古志村所蔵民俗資料の整理状況について」『災害と資料』3 号、2009 年に拠っている。

(6) 以下の記述は、池田哲夫「民俗資料点描-旧山古志民俗資料館所蔵資料から-」『災害と資料』3 号、2009 年に拠っている。

(7) 「クリエイティブ・コモンズ」は、「クリエイティブ・コモンズ・ライセンス」と同義のものとして使われることもある。本稿では、同義のものとして使用している。「クリエイティブ・コモンズ・ジャパン」の公式サイトは、「クリエイティブ・コモンズは、創造的な作品に柔軟な著作権を定義するライセンスシステムを提供する NPO 法人」と説明している (<http://creativecommons.jp/>)。

また、米国の「クリエイティブ・コモンズ」の公式サイトは、“Creative Commons is a nonprofit corporation dedicated to making it easier for people to share and build upon the work of others, consistent with the rules of

copyright”と説明している(<http://creativecommons.org/about/>)。

(8) 米国の「クリエイティブ・コモンズ」の公式サイト (<http://creativecommons.org/>) の年表によれば、2008年時点で、「クリエイティブ・コモンズ・ライセンス」を採用した著作物が世界中で1億3000万あることになっている(130 million CC licensed works)。

表1 新潟歴史資料救済ネットワーク5年間の取り組み

2004年 10/31	シンポジウム「市町村合併と公文書保存」(主催:新潟史学会等、於:新潟大学)直前に“新潟歴史資料救済ネットワーク”立ち上げのための会合。シンポジウムで事務局を新潟大学人文学部に置くことが提案される。
11/4	新潟大学人文学部の日本史・地理・考古・民俗の教員から事務局設置の同意を得る。
11/5	新潟歴史資料救済ネットワーク事務局活動開始。Webページとメーリングリスト開設
11/11	小千谷市の蔵調査実施
11/15	小千谷市A家蔵の歴史資料搬出の打合せ会
11/20	第1回小千谷市A家蔵の歴史資料搬出。2tトラック2台分の歴史資料を新潟県立歴史博物館に搬出する。参加者25人(新潟大学13(教員6・院生・学生7)・長岡造形大2・新潟県立文書館3・新潟県立歴史博物館5・新潟市歴史博物館1・高校教員1)
11/21	第1回会合(於:新潟大学人文学部)
11/28	全国歴史資料保存利用機関連絡協議会資料保存研究セミナー「宮城地震と資料保存」(於:宮城県公文書館)矢田俊文「新潟歴史資料救済ネットワークの取り組み」報告
11/29	第2回小千谷市A家蔵の歴史資料搬出。2tトラック1台、大型乗用車4台分の歴史資料を新潟県立歴史博物館に運び込む。参加者41人(新潟大学7(教員1・院生4・学生2)・新潟県立歴史博物館5・新潟県立文書館6・上越市総合博物館3・上越市史編さん室4・新潟市歴史博物館4・県外7(埼玉県3・群馬県2・長野県2))
12/1	新潟資料ネットのチラシを参考にして、小千谷市が市報に郷土資料の保存に関する内容を掲載し全戸配布。骨董屋から疑義の問合せを受けた同市教育委員会は新潟資料ネット事務局に事例照会。「歴史資料を骨董屋に売り払い後悔した」という記事が掲載された宮城保全ネットニュースを教育委員会へ送り、事なきを得る。「市報おぢやお知らせ版」は下記のとおり。 2004年11月25日付「市報おぢやお知らせ版」第106号 「郷土資料の保存にご協力を」 社会教育課 電話82・9111 土蔵などに所蔵されている古文書や古美術品などに被害はありませんか。古文書などには、貴重な歴史資料など価値の高いものがあります。汚れたり破損しても修復できます。また、古物商などに不当に安く売ってしまい、後悔したという事例が多くあります。古文書などの保存や取り扱いでお困りの場合は、下記までご連絡ください。 ■連絡先/社会教育課(市民会館内) 電話82・9111 FAX82・9112
12/2	地震・災害等調査等活動に関する学内交流会(於:新潟大学農学部、学生ボランティア・看護師・地質学研究者等の報告)矢田俊文「新潟歴史資料救済ネットワークの活動の現状と課題」報告
12/4	NHKおはよう日本(関東エリア)で約10分間、古美術商・新潟県立文書館の活動とともに、新潟歴史資料救済ネットワークの活動が紹介される。

	12/11	新潟県立歴史博物館に小千谷市から搬入した2tトラック4台分の歴史資料のクリーニング・目録作成作業を同館で実施。参加者36人〈新潟大15(教員1・附属図書館4・OD1・院生3・学生5・留学生1)、上越教育大学院生1・長岡造形大学学生3・県立歴史博物館3・県立文書館2・県埋蔵文化財調査事業団2・加茂市史編纂室3・上越市史編さん室1・弥彦村教育委員会1・高校教員1・元高校教員1)〈県外参加者1〉、〈女性19・男性17〉。粗い目録であるが、全体の約1/3終了。解散後、同博物館で第2回新潟資料ネット会合。
	12/15	山古志村教育長の案内にて新潟資料ネット2人・新潟県立歴史博物館2人が全村民避難の山古志村に入り、現地にて民具・文書の搬出の打合せ。
	12/19	小千谷市で歴史資料所在確認調査。参加者22人〈新潟大学7・県立文書館5・新潟県民具学会1・上越市史編さん室2・元高校教員1・高校教員1・上越教育大学3)
	12/22	現代的教育ニーズ取組支援プログラム(於:神戸大学文学部)矢田俊文「歴史資料の保管と廃棄—震災・市町村合併を中心に—」報告
	12/23	山古志村教育委員会・新潟県立歴史博物館と協力し、山古志村の民具・文書の救出を予定(49人参加予定)。降雪のため延期を余儀なくされる。
2005	1/8	新潟県立歴史博物館に小千谷市から搬入した歴史資料のクリーニング・目録作成作業を同館で実施(第2回)。参加者38人〈新潟大学22(教員4[人文3・教育人間1]・院生4・学生9・附属図書館4・OD1)、県立歴史博物館4・県立文書館2・柏崎教育委員会1・上越市史編さん室2・高校教員1)〉。粗い目録であるが、全体の約2/3終了。
	1/16	文化財保存修復学会防災セミナー(於:新潟県立近代美術館)山本幸俊(上越市史編さん室・新潟資料ネット)「被災文化財の救済活動報告」報告
	1/22	新潟日報と日本経済新聞文化欄に記事掲載(新潟日報オピニオン「歴史資料救済ネット設立3ヵ月、復興支える心の糧に」、日本経済新聞「被災地の歴史資料救え」)
	1/22	文化財保存修復学会例会(於:兵庫県尼崎市立花公民館)矢田俊文「中越地震における文化財被災と救済」報告
	1/25	NHKクローズアップ現代「“家の宝”をどう守る～中越地震の波紋～」、東北大学・神戸大学とともに新潟大学人文学部の取り組みを紹介。
	1/29	新潟大学・中越地震新潟大学調査団「第1回公開報告会 新潟県連続災害の検証と復興への視点—第1回:7.13豪雨災害と中越地震の総合的検証—」矢田俊文「被災地からの歴史資料救済活動の現状と課題」報告
	1/30	新潟県立歴史博物館に小千谷市から搬入した歴史資料のクリーニング・目録作成作業を同館で実施(第3回)。参加者31人〈新潟大学15(教員3・院生2・4年8・3年1・2年1)・文書館3・県埋蔵文化財調査事業団2・高校教員2・中学教員1・小学校教員1・県立歴史博物館4)
	2/12	午前、第3回新潟資料ネット会合。 午後、シンポジウム「新潟県中越地震からの文化遺産の救出と現状」(於:新潟大学人法経棟大会議室、主催:新潟大学人文学部附置地域文化連携センター、後援:新潟大学超域研究機構プロジェクト「大域的文化システムの再構成に関する資料学的研究」)

	<p>基調報告 平川新（東北大学教授）「宮城県北部連続地震と歴史資料の救済」 報告 竹内公英（新潟県文化行政課）「新潟県文化行政課の取り組み」、本井晴信（新潟県立文書館）「新潟県立文書館の取り組み」、田邊幹（新潟県立歴史博物館）「新潟県立歴史博物館の取り組み」、高橋由美子（十日町情報館）「十日町情報館の取り組み」、田中洋史（長岡市立中央図書館文書資料室）「長岡市立中央図書館文書資料室の取り組み」、丸山真也（小千谷市教育委員会社会教育課）「小千谷市教育委員会社会教育課の取り組み」、原直史（新潟大学人文学部）「新潟歴史資料救済ネットワークの取り組み」</p> <p>パネルディスカッション パネリスト:平川新・竹内公英・本井晴信・田邊幹・高橋由美子・田中洋史・丸山真也・原直史、司会:矢田俊文（新潟大学人文学部附置地域文化連携センター副センター長）</p>
2/18	資料保存セミナー（全史料協近畿部会第 76 回例会、於：西宮市民会館）花岡公貴（上越市市史編さん室）「新潟歴史資料救済ネットワークの取組み」報告
3/12	新潟県立歴史博物館に小千谷市から搬入した歴史資料のクリーニング・目録作成作業を同館で実施（第 4 回）。参加者 5 人（新潟大学）。目録作成作業終了。
3/15	新潟県立歴史博物館に搬入した歴史資料の目録を同館へ 1 部、小千谷市教育委員会社会教育課へ 2 部送付。小千谷市に所蔵者への 1 部送付を依頼。25 日目録の附属資料を同所に送付。
3/26	十日町情報館にて打合せ。新潟資料ネット 2 名。救出資料と収蔵庫の見学。
4/17	十日町情報館が救出した岡田隆生家の古典籍の資料目録作成作業実施。参加者 23 人（新潟大学 10（教員 5（うち国文学教員 2 名）・院生 3・学生 2）・県立文書館 3・上越教育大学 1・長岡市立中央図書館文書資料室 1・上越市公文書館準備室 1・高校教員 2・中学教員 1・県外 1・ほか 3）。3 台のデジタルカメラで 2068 コマ撮影。目録作成ほぼ終了。4/22 残りの目録 38 枚を作成し、十日町情報館に送付。写真も送付（CD-R2 枚）
4/26	新潟大学人文学部歴史系ゼミナール協議会・歴史系教員協議会共催新入生歓迎講演会（於：新潟大学）矢田俊文「中越地震被災地からの文化遺産の救出」講演
5/13、14	2004 年 11 月に被災地小千谷市から新潟県立歴史博物館に搬入した資料の目録（電子化版）を小千谷市教育委員会社会教育課・新潟県立歴史博物館へ送付。目録作成作業は、12 月 11 日・1 月 8 日・1 月 30 日、3 月 12 日の全 4 回実施。資料の点数 1565 点、個数 9176 個。作業参加者延べ 111 人。
5/20	『新潟史学』53 号刊行（新潟史学会、総 86 頁） 特集 1「市町村合併と公文書保存」 「地域史料としての町村役場文書」丑木幸男 「上越市の旧町村公文書の保存と活用について」花岡公貴 「新潟県立文書館の調査収集活動」中川浩宣 「佐渡の区有文書保管の伝統について」本間恂一 「討論」 特集 2「新潟県中越地震と歴史資料の救済」 「新潟中越大震災と歴史資料保全活動」山本幸俊 「被災体験と「小千谷地震」予知の記憶」西澤睦郎 「歴史資料救済活動に参加して」岡田佐輝子

	<p>「新潟歴史資料救済ネットワーク活動のための準備について」 笹川真理子</p> <p>「新潟県中越地震と貞観五年の越中越後地震記事」 小林昌二</p>
5/21、22	<p>山古志の民具・文書搬出作業を実施。新潟県立歴史博物館・長岡市・新潟県・柏崎市と連携。参加者は両日で100人。県内博物館や大学に勤務する民俗学研究者総出動。民具が置かれていた民俗資料館は旧小学校を利用。1階、2階の計6教室と廊下・階段等に大量の民具が配架。4tトラック3台、2tトラック6台分の民具を4カ所へ搬出。1964年から4期つとめた山古志村第三代村長佐藤久宛の書簡（段ボール1箱分）と大量の名刺を搬出。屏風の裏ばりの文書・お札も屏風ごと搬出。古文書は、山古志中学校寄宿舎にあった坂牧家文書など約200箱を搬出。新潟大学班は、朝7時に大学へ集合。24人乗りマイクロバスで現地へ移動。県立歴史博物館での解散時間が21日午後8時30分、22日午後9時15分。22日の大学帰着時間は午後10時をまわった。</p>
6/1	<p>矢田俊文編『新潟県中越地震 文化遺産を救え』刊行（高志書院、総96頁）。2月12日開催のシンポジウム「新潟県中越地震からの文化遺産の救出と現状」の報告を掲載</p>
6/10	<p>新潟県文化財保護連盟総会（於：新潟会館）矢田俊文「中越地震と文化財・歴史資料」講演</p>
6/25	<p>日本歴史学協会主催「史料保存利用」問題シンポジウム（於：早稲田大学文学学術院）原直史「新潟県中越地震と史料救出」報告</p>
6/27	<p>新潟大学復興科学センター要項制定。生活セイフティーネット分野に“中越地震被災地からの救出資料による地域文化再生プロジェクト”設置</p>
7/29	<p>小千谷市佐藤明夫家・佐藤英一家の蔵・歴史資料の調査。佐藤明夫家・佐藤英一家より新潟大学に歴史資料寄贈（大正10年と12年の日記は寄託）</p> <p>〔主な寄託文書〕米穀商・地主らの産米改良運動の資料、町村制出発直後の明治23年以降ほぼ連年の鴻野谷村の歳入出予算・決算、学校令施行前後の小学校の進級証明書・優等賞・褒賞類</p> <p>〔寄託日記〕大正10年・12年高田師範在学当時の佐藤軍二日記、記事には教育課程自由画について、関東大震災の際に信越線で逃れてきた市民が高田駅にあふれる等の記事あり。</p>
8/14	<p>新潟県立歴史博物館に小千谷市から搬入した歴史資料の目録補充作業を同館で実施。参加者17人</p>
8/23	<p>新潟県高等学校教育研究会地理歴史・公民部会日本史分科会（於：三条高校）浦部頼之（県立長岡工業高校教諭）「中越地震と文化財―救済ネットボランティアに参加して―」報告</p>
8/25	<p>平成17年度新潟県文化財指導者講習会～災害復興への取り組みから～（於：新潟県庁、主催：新潟県教育委員会）矢田俊文「中越地震被災地からの文化財・歴史資料救出の取り組み」講演</p>
8/30～9/1	<p>山古志から搬出した民具の資料目録作成作業（於：県文化行政課文化財収蔵庫）。新潟大学教員（民俗学）2人、学生30人。実習として実施。整理・カード作成終了資料点数329点</p>
9/9	<p>被災地から搬出した歴史資料を保管する長岡市浦瀬町倉庫、長岡市中央図書館文書資料室の調査（新潟資料ネット事務局1人）</p>

9/13、14	小千谷市山谷佐藤英一家・佐藤明夫家から新潟大学に寄贈・寄託を受けた歴史資料の目録作成作業（於：新潟大学人文学部）。参加者8人
9/30	第3回「災害から文化財を守る」（於：静岡県地震防災センター）矢田俊文「新潟県中越地震における文化遺産救済活動について」報告
12/10	<p>シンポジウム「新潟県中越地震と文化財・歴史資料—1年間のとりくみ—」（於：新潟大学、主催：新潟大学人文学部地域文化連携センター・新潟大学中越地震被災資料救出をめぐる地域連携・教育プロジェクト）</p> <p>報告 古賀豊（新潟大学人文学部助教授）「DVD『山古志民俗資料館収蔵品救出プロジェクトの記録』の編集を終えて」</p> <p>上映会「DVD『山古志民俗資料館収蔵品救出プロジェクトの記録』」</p> <p>基調報告 奥村弘（神戸大学文学部助教授、同学部地域連携センター教員）「災害と地域歴史遺産—10年間の取り組み—」、河野未央（歴史資料ネットワーク）</p> <p>「水害からの資料保全活動について—2004年の台風23号被害を中心に」、佐々木和子（神戸大学文学部地域連携センター研究員）「震災資料のアーカイブ構築について—兵庫県の事例から—」</p> <p>報告 小島大介（新潟県文化行政課）「新潟県文化行政課の取り組みの現状について」、中川浩宣（新潟県立文書館）「被災文書等への対応～現状と課題～」、前嶋敏（新潟県立歴史博物館）「新潟県立歴史博物館の文化財救済事業」、金垣孝二（長岡市立中央図書館文書資料室）「資料整理ボランティアの活動と歴史資料所在確認調査」、高橋由美子（十日町情報館）「被災資料の救済と古文書整理ボランティアの活動」、西澤睦郎（新潟県立糸魚川白嶺高校教員）「被災体験と被災資料の目録作成作業への参加」、浦部頼之（新潟県立長岡工業高校教員）「高校教員として被災資料の救出・目録作成作業に参加して」、池田哲夫（新潟歴史資料救済ネットワーク）「山古志からの民具の救出と目録作成作業」</p> <p>パネルディスカッション パネリスト：奥村弘・河野未央・佐々木和子・小島大介・中川浩宣・前嶋敏・金垣孝二・高橋由美子・西澤睦郎・浦部頼之・池田哲夫、司会 矢田俊文（新潟大学人文学部地域文化連携センター副センター長）</p>
2006 1	DVD『山古志民俗資料館収蔵品救出プロジェクトの記録』（約25分、製作：新潟大学人文学部地域文化連携センター・新潟歴史資料救済ネットワーク）納品
3/20	<p>矢田俊文編『新潟県中越地震と文化財・歴史資料—1年間のとりくみ—』刊行（新潟大学人文学部地域文化連携センター、総184頁）</p> <p>第1部 新潟県中越地震と文化財・歴史資料—1年間のとりくみ—</p> <p>「水害からの資料保全活動について—2004年の台風23号被害を中心に—」河野未央</p> <p>「震災資料のアーカイブ構築について—兵庫県の事例から—」佐々木和子</p> <p>「新潟県文化行政課の取り組みの現状について」小島大介</p> <p>「被災文書等への対応—現状と課題—」中川浩宣</p> <p>「新潟県立歴史博物館の文化財救済事業」前嶋敏</p> <p>「資料整理ボランティアの活動と歴史資料所在確認調査」金垣孝二</p> <p>「被災資料の救済と古文書整理ボランティアの活動」高橋由美子</p> <p>「被災体験と被災資料の目録作成作業への参加」西澤睦郎</p> <p>「高校教員として被災資料の救出・目録作成作業に参加して」浦部頼之</p>

		<p>「山古志からの民具の救出と目録作成作業」池田哲夫</p> <p>第2部 文化財・歴史資料関係新潟県自治体等発給文書等資料集（2004年12月23日より）新潟県文化行政課・新潟県立文書館、新潟県歴史資料保存活用連絡協議会、災害対策本部、新潟県立歴史博物館、十日町情報館、長岡市立中央図書館文書資料室、新潟県歴史資料救済ネットワーク</p> <p>第3部 中越地震被災地からの救出資料等</p> <p>「佐藤軍二日記・抄」矢田俊文、「小千谷市佐藤明夫家文書からの若干の紹介—北魚沼郡の産米改良運動の始まりと修学奨励の褒状—」溝口敏磨、市報おぢや（昭和43年12月10日、平成16年11月25日）再録、広報やまこし（昭和53年8月～昭和54年12月）再録</p>
3/25		<p>人と文化遺産の保存継承ミーティング（主催：東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター）矢田俊文「新潟県中越地震における文化財・歴史資料の救済活動」講演</p>
4/1		<p>新潟大学災害復興科学センター設置（旧積雪地域災害研究センターと旧コアステーション復興科学センターを統合改組）。アーカイブズ分野新設。</p>
8/29～31		<p>山古志から搬出した民具の資料目録作成作業（於：県文化行政課文化財収蔵庫）。新潟大学教員（民俗学）2人・学生13人・長岡市立科学博物館1人・山古志分室人・旧山古志村民3人。整理・カード作成終了資料点数140点</p>
12/9		<p>資料保存研究セミナー「歴史資料の現地保存への取り組み—中越地震被災経験をふまえて—」（於：長岡市立中央図書館、主催：全国歴史資料保存利用機関連絡協議会資料保存委員会、共催：長岡市立中央図書館文書資料室・新潟大学災害復興科学センターアーカイブズ分野・新潟歴史資料救済ネットワーク・新潟史学会）</p> <p>報告 金垣孝二（長岡市立中央図書館文書資料室長）・田中洋史（同文書資料室嘱託員）「長岡市立中央図書館文書資料室の取り組み～災害後の歴史資料の保存と活用～」、高橋由美子（十日町情報館事業係主任）「十日町情報館の取り組み」、田邊幹（新潟県立歴史博物館主任研究員）「山古志からの民具・文書救出の取り組み」、伊藤然（全国歴史資料保存利用機関連絡協議会資料保存委員会）『資料保存と防災対策』全史料協資料保存委員会の考え方</p> <p>パネルディスカッション パネリスト：山本幸俊（上越市公文書館準備室）・金垣孝二・田中洋史・高橋由美子・田邊幹・伊藤然、司会 矢田俊文（新潟大学災害復興科学センターアーカイブズ分野分野長）</p>
2007	3/10	<p>新潟大学災害復興科学センターアーカイブズ分野調査研究誌『災害と資料』第1号刊行</p> <p>『災害と資料』の刊行にあたって」矢田俊文</p> <p>「長岡市立中央図書館文書資料室の取り組み—災害後の歴史資料の保存と活用—」金垣孝二・田中洋史</p> <p>「十日町市における被災資料の緊急避難と整理—市民と行政の連携の試み—」高橋由美子</p> <p>「新潟県立歴史博物館の取り組み—山古志からの民具・文書資料の救済を中心に—」田邊幹</p> <p>「資料保存と防災対策—全史料協資料保存委員会の考え方—」伊藤然</p> <p>「災害前の歴史資料保存の取り組み—「ふくしま文化遺産保存ネットワーク」の</p>

	<p>設立を通じて―」 轡田克史・山田英明</p> <p>「災害から地域文化遺産をまもる―日常的な文化遺産保存継承・活用の中に含まれる防災活動としての試み―」 手代木美穂</p> <p>「山古志村民俗資料館と収蔵民具」 飯島康夫</p> <p>「関東大震災に関わる直江津町役場文書―『京浜大震災救済書類』―」 山本幸俊</p> <p>「坪谷善四郎書翰・日記にみる一八九四年東京地震・一八九五年茨城県南部の地震」 矢田俊文</p>
3	<p>『民具研究』135号発刊（日本民具学会）</p> <p>「災いはわすれたころに」 池田哲夫</p> <p>「新潟県中越地震と歴史資料保存の取り組み―十日町市における市民と行政の連携の試み―」 高橋由美子</p>
7/19	<p>7月16日発生中越沖地震の被災地柏崎市の現地調査。</p> <p>土蔵：諏訪町・東本町と西本町の一部、西本町A家：倒壊していて資料救出は困難と判断</p> <p>図書館：柏崎市立図書館・新潟産業大学・新潟工科大学</p> <p>転倒防止の地震対策の効果で書架の転倒はない。柏崎市立図書館・新潟工科大学の被害が大。重量のある書架自体がひしゃげ歪むものもあり。図書・文書資料等はほぼすべて落下。柏崎市立図書館収蔵展示室の仏像はテグスによって落下を免れる。三条市と長岡市の図書館職員がボランティアで復旧作業を応援。</p>
7/20	<p>市町村教育委員会文化財主管課長宛に新潟県教育長文化行政課長・新潟県立文書館長の連名で「被災『文書等』の取扱いについて（お願い）」が出される。</p>
7/22	<p>柏崎市の調査―西本町寺院：土蔵造の本堂、倒壊の危険。</p> <p>西本町A家：東北芸術工科大学を中心とした山形県の文化財歴史資料救出グループ4人・新潟歴史資料救済ネットワーク2人で資料救出活動。陶磁器等、A家の歴史資料の目録写真帳、家族のアルバム等を救出。1t積みワゴン車2台分を搬出。一旦商家知己の柏崎市議の会社倉庫に搬入。</p>
7/24	<p>西本町A家の資料を新潟県立歴史博物館に移送。博物館職員4人対応</p>
7/28	<p>柏崎市災害対策本部は、柏崎市総合企画部文化振興課発信「被災地区の皆さんへ！―歴史資料についてのお願い―」というチラシの避難所配布を決定。新潟県立歴史博物館・新潟県立文書館、新潟歴史資料救済ネットワーク（新潟大学人文学部矢田研究室気付）が問合せ先として掲載される。</p>
8/3	<p>柏崎市総合企画部文化振興課の配布チラシをみた柏崎市民から新潟歴史資料救済ネットワークに連絡があり、資料について相談。</p>
8/4	<p>3日に相談をうけた柏崎市民宅へ状況調査に出向く。資料の一時避難の手伝いを約束。資料は土蔵に収められていてすぐにでも運びださねばならない状態ではないこと、半壊・全壊等の罹災証明の申請で当主側が多忙であることから、作業実施は後日となる。（のち自力で復旧するとの連絡あり）。</p>

8/25	刈羽村民俗資料収納庫の民具救出。刈羽村教育委員会・新潟県立歴史博物館・新潟大学災害復興センターアーカイブズ分野・新潟歴史資料救済ネットワークが連携。4tトラック3台で旧寺泊高校（長岡市）に一時避難。参加者40人（新潟大学19・新潟県立歴史博物館5・越佐歴史資料調査会1・十日町情報館1・新潟市博物館1・高校教員6・新潟県立文書館1・東北芸術工科大学3・山形県高畑町役場1・ふくしま文化遺産保存ネットワーク2）
8/29～31	山古志から搬出した民具の資料目録作成作業（於：県文化行政課文化財収蔵庫）。新潟大学教員（民俗学）2人・学生27人・長岡市立科学博物館1人・山古志分室1人・旧山古志村民2人。整理・カード作成終了資料点数284点
12/8	シンポジウム「震災資料の保存と活用—図書館・図書館・博物館—」（於：新潟大学総合教育研究棟大会議室、主催：新潟大学災害復興科学センターアーカイブズ分野、共催：新潟大学附属図書館・新潟史学会・新潟歴史資料救済ネットワーク） 報告 岡風呂賢・田原勝典（神戸大学附属図書館）「神戸大学附属図書館震災文庫の取り組み」、星純子（長岡市立中央図書館文書資料室）「長岡市立中央図書館文書資料室の震災資料の保存と活用の取り組み」、野沢篤史（新潟県立図書館）「『新潟県中越大震災文献速報』の作成と課題～新潟県立図書館の取り組み～」、野堀正雄（新潟県立歴史博物館）「震災民具救済の実例及び反省と今後の課題」 パネルディスカッション パネリスト：岡風呂賢・田原勝典・星純子・野沢篤史・野堀正雄、司会：矢田俊文（新潟大学災害復興科学センターアーカイブズ分野）
2008 1	DVD「新潟県中越沖地震被災地刈羽村民俗資料収蔵庫資料搬出作業の記録（2007年8月25日）」（編集：古賀豊、製作・著作：新潟大学災害復興科学センターアーカイブズ分野、新潟歴史資料救済ネットワーク）納品。クリエイティブ・コモンズで制作し、新潟大学学術リポジトリに掲載
3/10	『災害と資料』第2号刊行 「神戸大学附属図書館「震災文庫」の取り組み」田原勝典・岡風呂賢 「長岡市立中央図書館文書資料室の震災資料の保存と活用の取り組み」星純子 「『新潟県中越大震災文献速報』の作成と課題—新潟県立図書館の取り組み」野澤篤史 「震災民具救済の実例及び反省と今後の課題」野堀正雄 「新潟歴史資料救済ネットワーク事務局の事前準備—刈羽村民俗資料収納庫からの民具救出活動の場合—」笹川真理子 「旧山古志村救済文書資料の概要」原直史 「公文書等に見る災害と復興—新潟県立文書館所蔵文書の活用を通じて—」尾崎法子 「新潟地震（1964年）に関する新潟市所蔵資料の活用について—インターネットによる公開事例の紹介—」今野誠
3/25	池田哲夫・飯島康夫・新潟県立歴史博物館編『山古志 ふたたび』刊行（発行：新潟大学人文学部附置地域文化連携センター、新潟大学災害復興科学センターアーカイブズ分野、総25頁、オールカラー）

5/10	<p>前年 8 月 25 日に旧寺泊高校（長岡市）へ一時避難させていた刈羽村の民具を新しい刈羽村民俗資料収納庫への返還する作業を実施。参加者 39 人（新潟大学人文学部教員 9・新潟大学院生学生 9・元新潟大学学生 5・元筑波大学教員 1・新潟県立歴史博物館 4・新潟県立文書館 2・新潟市歴史博物館 1・長岡市立中央図書館文書資料室 2・越佐歴史資料調査会 2・ふくしまネット 2・東北芸術工科大学 1 等）。午前 9 時～午後 2 時 30 分。</p> <p>終了後、第 4 回新潟資料ネット会合。</p>
5/14	<p>柏崎市 A 家へ一時預かりしていた資料を返却。新潟県立歴史博物館当館職員 4 人。車 3 台。搬入時、荷札で 80 点以上の資料をすべて返却する。</p>
6/21～8/3	<p>新潟県立歴史博物館「山古志 ふたたび」展開催。新潟大学災害復興科学センターアーカイブズ分野も主催。</p>
7/26	<p>「山古志 ふたたび」展開連事業「ミュージアム・シアター」開催。映画「鯉のいる村」上映（於：新潟県立歴史博物館講堂、協力：新潟大学人文学部附置地域文化連携センター）</p>
8/26～28	<p>山古志から搬出した民具の資料目録作成作業（於：県文化行政課文化財収蔵庫）。新潟大学教員（民俗学）2 人・学生 17 人・長岡市立科学博物館 1 人・山古志分室 1 人・旧山古志村民 2 人。整理・カード作成終了資料点数 220 点</p>
10/4	<p>第 5 回新潟資料ネット会合。</p>
12/4	<p>DVD「新潟県中越沖地震被災地刈羽村民俗資料収納庫への民具返還プロジェクトの記録（2008 年 5 月 10 日）」（編集：古賀豊、製作・著作：新潟大学災害復興科学センターアーカイブズ分野・新潟歴史資料救済ネットワーク）納品。</p>
12/6	<p>シンポジウム「震災資料と復興・市民参加」（於：新潟大学総合教育研究棟大会議室、主催：新潟大学災害復興科学センターアーカイブズ分野、共催：新潟史学会、新潟歴史資料救済ネットワーク）</p> <p>報告 佐藤大介（NPO 法人宮城歴史資料保全ネットワーク）「岩手・宮城内陸地震での歴史資料保全活動—『二度目の震災』にどう対応したか—」、原直史（新潟歴史資料救済ネットワーク）「新潟歴史資料救済ネットワークの取り組み～中越地震から中越沖地震へ～」、田中洋史・小林良子（長岡市立中央図書館文書資料室）「長岡市立中央図書館文書資料室の 4 年間の取り組み～資料整理ボランティアを中心に～」、丸山克巳（十日町古文書整理ボランティア）「ボランティアによる文書整理の意義と課題」</p> <p>パネルディスカッション パネリスト：佐藤大介・原直史・田中洋史・小林良子・丸山克巳、司会：矢田俊文（新潟大学災害復興科学センターアーカイブズ分野）</p>
2009	<p>1/9、16、23</p> <p>新潟大学災害復興科学センターは平成 20 年度新潟大学 TV 公開講座「地震災害への備えを考える—中越地震・中越沖地震で学んだこと—」を開講（BSN 新潟放送、毎週金曜日午前 9 時 55 分～10 時 50 分放映）。第 1 回「あの時にながおこったのか？」、第 2 回「地震直後にながができるのか？」、第 3 回「復興へ向けてながができるのか？」。</p> <p>第 2 回で被災地域における文化財、歴史資料等の救出・保全の論点、災害における個人的な文化財、資料の意味を取り上げる。</p>
3/25	<p>『災害と資料』第 3 号刊行</p> <p>「岩手・宮城内陸地震での歴史資料保全活動—「二度目の震災」にどう対応した</p>

	<p>かー」佐藤大介 「長岡市立中央図書館文書資料室の4年間の取り組み—資料整理ボランティアを中心に—」小林良子・田中洋史 「ボランティアによる文書整理の意義と課題」丸山克巳 「新潟県立歴史博物館の取り組み—「山古志ふたたび」展—」田邊幹 「旧山古志村所蔵民俗資料の整理状況について」池田哲夫・飯島康夫 「民俗資料点描—旧山古志民俗資料館所蔵資料から—」池田哲夫 「旧山古志村民俗資料館所蔵の養蚕具」飯島康夫 「新潟における幕末・明治初期の写真」古賀豊 「社会学の震災調査と資料収集—新潟県中越地震・中越沖地震の調査を通して—」松井克浩 「一八〇二年佐渡小木地震と地震史料」矢田俊文</p>
9/1～3	<p>山古志から搬出した民具の資料目録作成作業（於：旧山古志村立虫亀小学校）。新潟大学教員（民俗学）2人・学生12人・長岡市立科学博物館1人・山古志分室1人・旧山古志村民2人。整理・カード作成終了。資料点数89点。</p>
9/27	<p>第6回新潟資料ネット会合。</p>
10/23	<p>伊藤忠雄ほか『地震災害への備えを考える—中越地震・中越沖地震で学んだこと—』刊行（新潟日報事業社、総70頁）。矢田俊文「文化財・歴史資料の救出」38～42頁</p>
12/5	<p>シンポジウム「文化財・歴史資料の保全：災害時の取り組み・日常時の取り組み—2004年水害・地震から5年—」（於：新潟大学総合教育研究棟大会議室、主催：新潟大学災害復興科学センターアーカイブズ分野、共催：地域歴史資料学研究会（基盤研究（S）「大規模自然災害時の史料保全論を基礎とした地域歴史資料学の構築」）、新潟史学会、新潟歴史資料救済ネットワーク） 報告 三井田忠明（元柏崎市立博物館）「中越沖地震と柏崎市立博物館の取り組み—被災館としての立場から—」、奥村弘（神戸大学文学研究科）「歴史資料ネットワークの15年—被災歴史資料保全の「歴史」を考える—」、松下正和（神戸大学文学研究科）「風水害による水損歴史資料の保全活動」、本井晴信（新潟県立文書館）「災害時県立文書館の役割」、前嶋敏（新潟県立歴史博物館）「新潟県立歴史博物館の5年間の取り組み」、金垣孝二（長岡市立中央図書館文書資料室）「長岡市立中央図書館文書資料室の5年間の取り組み—「長岡市・文書資料室型」の成果と課題—」、山本幸俊（越佐歴史資料調査会）「越佐歴史資料調査会と被災資料への対応」 パネルディスカッション パネリスト：三井田忠明・奥村弘・松下正和・前嶋敏・本井晴信・金垣孝二・山本幸俊、司会：矢田俊文（新潟大学災害復興科学センターアーカイブズ分野）</p>

表 2 新潟歴史資料救済ネット初年度支出内訳

<p>【資材費】 ……梱包資材、燻浄用品</p> <p>薄口葉紙、エアキャップ、布テープ、乾電池、ケント紙（目録カード等用紙）、ダンボール、ブルーシート、リチウムシリンダー、殺虫剤（ミラクンS）</p>
<p>【消耗備品】 ……記録媒体、活動のとき必要となる備品、事務用品</p> <p>マスク、軍手、ヘルメット、腕章（救済ネットワーク名入り）、名札、セロテープ、輪ゴム、のり、ゼムクリップ、ホチキス、付箋紙、巻尺、荷札、綿撚糸、刷毛、台車、文具品（鉛筆、消しゴム、ボード）、デジタルカメラ、ピクチャーカード、ビデオカメラ、乾電池、メモリスティック、CD-R、ティッシュペーパー、ビニール袋、ウェットティッシュ、割り箸、救急箱・薬品、封筒（角2型、1000枚）、領収証綴</p>
<p>【交通費】</p> <p>貸切バス代金 山古志、高速料金（貸切バス）山古志、レンタカー代（トラックほか）小千谷、ガソリン代、学生交通費</p>
<p>【印刷代等】</p> <p>シンポジウム資料集印刷費ほか</p>
<p>【昼食飲料代】</p> <p>弁当、おにぎり・パン、飲み物、菓子</p>
<p>【通信費】</p> <p>切手、郵便料金、宅急便料金</p>
<p>【ボランティア保険】</p>
<p>【予備費】 振込手数料</p>

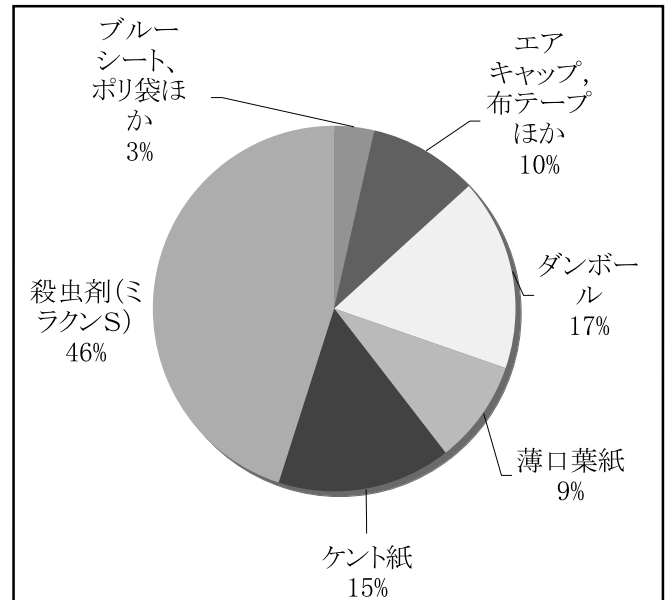


図 1 資材費に占める割合

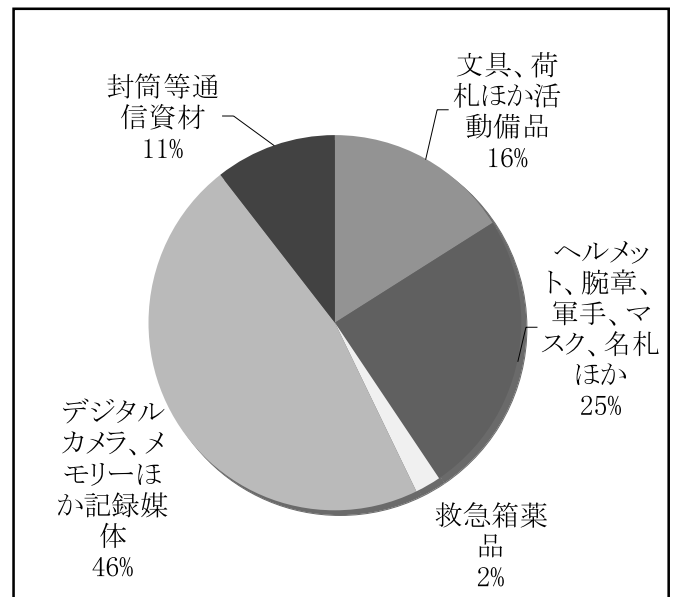


図 2 消耗備品費に占める割合

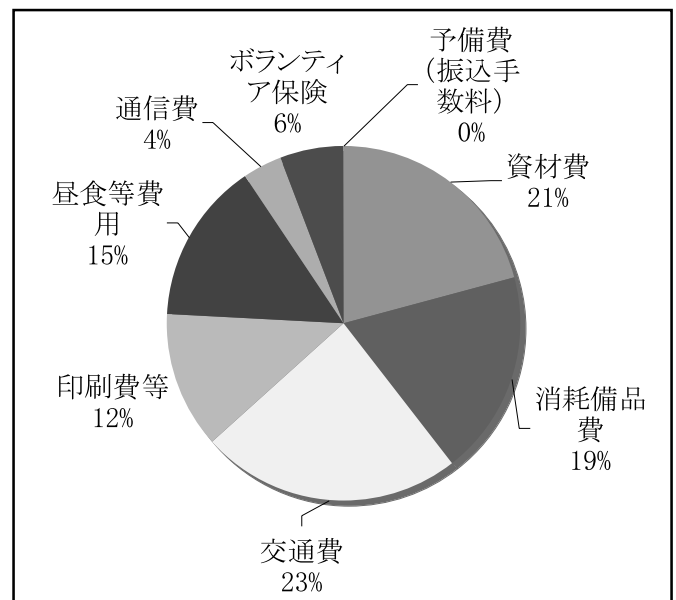


図 3 初年度 1 年間の支出内訳

刈羽村民俗資料収蔵庫からの民具の 救出活動のしおり

2007年8月25日

駐車場

刈羽村役場と環境改善センターの共同駐車場

集合場所

9時 刈羽村の環境改善センター（役場隣）と第二体育館の間

9時～12時作業

老人福祉センター隣の刈羽村民俗資料収蔵庫

トイレは老人福祉センターにあります

昼休み 12時～13時 環境改善センター会議室

13時～15時 作業

15時 出発 旧寺泊高校

旧寺泊高校にはトイレはありません

16時～17時 作業

17時 解散予定

- 注) 1. 調子が悪くなった方は、救護係に連絡ください。
2. 県内の学生の方には交通費を出します。昼休みに会計係（新潟大矢田）に申し出てください。
3. 旧寺泊高校：116号線から22号線に西に折れ、バス停寺泊高校前を左に登る。
4. 緊急の場合は、携帯090-8004-1114（新潟大矢田）に連絡ください。
5. 午前・午後、1回づつ小休憩を入れます。一斉に休憩してください。
6. 裏面に旧寺泊高校までの地図を載せています。見ておいてください。

班編成

A・B 蔵班：蔵から蔵入り口まで：分類ごとに搬出

A

B

C・D 搬出班：蔵入り口から梱包地点へ運搬

C

D

E・F・G・H 梱包班：民具の梱包

E

F

G

H

救護係

- 注) 1. 班ごとに代表を決めます。班代表の指示にしたがってください。
2. 班は進行状況により変更する場合があります。
3. 14時前に旧寺泊高校先発班を編成し、14時に出発します。